

2019年度活動報告

<事業の概要>

2019年度は学外学修センター稼働の3年目となり、インターンシップ、インデペンデントスタディ、サービスラーニングの活動に延べ259名（前年比63名減）の学生が参加した。

学外学修活動申請の効率UPに向けて ～学外学修申請のWEB化～

学外学修活動を行う事に伴う学外学修申請及び履修登録申請についてWEBシステム（オフキャン・ナビ）を導入しました。導入初年度という事もあり、試行錯誤の中での導入となりましたが、申請手順の効率化が図れました。2020年度は更にシステムの改善を図り学生サービスの充実を図ります。

2019年度実績

- ・WEBシステム（オフキャン・ナビ）の導入
- ・事前・事後学習日程の再整備
- ・学生スタッフによるNEWS LETTER（広報誌）作成

学生への提供 ～学外学修プログラムの再編～

2018年度の3名体制から2019年度は特任教員1名体制となった事もあり、2017、2018年度までの学生参加実績が多かったプログラムを中心に大学提供プログラムの再編成を行った。また、連携推進センターと連携し新規プログラムを実施した。

2019年度実績

- ・海外サマープログラム参加者22名
- ・インターンシップ参加者55名
- ・サービスラーニング参加者 63名
- ・インデペンデントスタディ参加者119名

連携推進センターや教職課程委員会との連携 によるバリエーションあるプログラムの提供

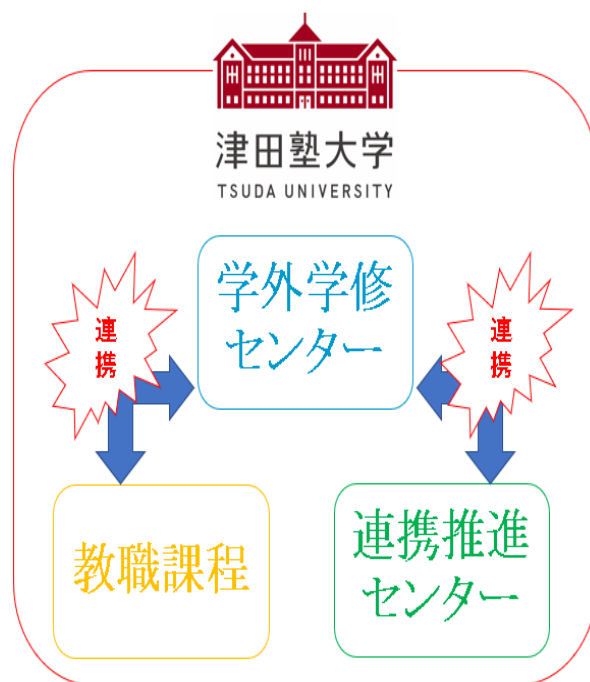
2018年度より設立された「連携推進センター」が香川大学と連携して行った「地域おこしプログラム」や教職課程委員会による「学校ボランティア」などが新たに提供・整備された。

2019年度実績

- ・連携推進センターなどとの連携による地域と大学による新しいプログラムの提供
- ・教職課程との連携による学校ボランティア活動の整備
- ・理系学生向けプログラムの増強

2020年度以降の計画

- ・学芸学部における学外学修科目の随意科目から共通科目への移行の検討
- ・学外学修センターの組織体制の整備強化
- ・OSSMA Plusなどの危機管理における学生の経済負担の軽減



＜取り組みに対する内部評価＞

実施日：2019年12月

評価者：学長補佐、総合政策学部長、学生委員長、教務委員長、国際センター長

実施方法

事業活動報告書及び関連資料を事前に配付し、同資料に基づき評価・改善点を報告

評価概要

（評価点）

- ・事業計画で予定されていた「申請書類のオンライン化」により、事務効率のみならず、学生のアクセシビリティを高める事ができた点の評価を得た。
- ・小平市教育委員会と連携して行われた「近隣の小中学校でのボランティア活動」をサービスラーニングとして取り入れた事は、教職を重視する本学における「学び」と直接つながる、という点で評価を得た。
- ・活動実績においては、理数系（数学科および情報科学科）の学生の参加者数が2017年度15名→2018年度25名→2019年度10月時点36名と着実に伸びており、文系のみならず理数系の学生が興味を持つようなプログラムが提供されている点で評価を得た。また全体の学外学修参加者数についても、2017年度236名、2018年度322名、2019年度10月時点273名と多くの学生が参加している。
- ・このような学外学修へ参加した学生について、内部評価者の一人から、担当するセミナー学生の例を挙げ次の様な評価を得た。「学外学修プログラムへの参加者は、毎年、自らの経験に基づく非常に優れた発表を行い、他の学生に与える刺激も大きい。また1年生または2年生時におけるプログラム参加経験で得た問題意識を、そのまま卒業論文へと発展させる学生もあり、非常に優れた卒業論文を完成させている。これらの学生たちは、必ずしも入学直後から積極的に現実社会とかかわるタイプではなく、どちらかと言うと大人しい学生も多いが、プログラムへの参加を契機として、国内のみならず国外へと関心を向ける学生もあり、学外学修プログラムは参加者の生き方をも変えうる契機となったのではないかと考えられる。参加者のアンケート結果は、これを裏付けている。」

（改善点）

- ・学外学修に取り組んだ学生とのつながりを維持し、卒業後にどのような活躍をし、津田塾大学での学外学修がその後の進路にどのような影響を与えたかについてもまとめられるとよいとの指摘を受けた。
- ・学外学修センターに関わる教員を増やすことで、活動前後の学修と活動の繋がりを強化し、効果を高める事ができるのではないか、という指摘を得た。
- ・このような指摘の中で、多くの内部評価者から2020年度以降の体制についての指摘を得た。例えば補助金が終了する2020年度以降に向けての体制整備が大きな課題であるという指摘や、人員や経費なども含め、どのような方向に進もうとしているのか(あるいはどのような展開が可能なのか)、展望を示す必要がある、といった指摘を得た。
- ・運営方針についての指摘としては、学外学修センターだけではなく大学として、今後どのように学外学修センターの運営を進めていくつもりであるのか、はっきりした方針を全学に示すべきである、という意見を頂いた。

＜取り組みに対する外部評価＞

実施日：2019年12月23日

評価者：他大学教員1名、企業・機関関係者2名

実施方法

事業活動報告書及び関連資料を事前に配付し、同資料に基づく質疑・応答

評価概要

（評価点）

- ・組織・体制面において「学びを通じた女性のエンパワーメント・女性による社会のエンパワーメント」の促進という明確な目的のもと、全学的な協力を得て学外学修センターが運営されている事に対する評価が高かった。
- ・学外学修センターについては、決して十分な人員配置が行われているとは言えない状況の中で、学生の主体性を最大限尊重しつつ、事前・事後学習、学外学修先の開拓、その後の連携体制の維持など、多岐にわたる業務を遂行している点に、評価を得た。
- ・学外学修プログラムにおいては、多様な参加学生を通じたトライ＆エラーを5年間に渡り実施している点に、評価を得た。
- ・外部評価者3人全てから、組織運営の点で、最小限のリソースで運営し、非常にコンパクトかつスマートな組織運営を行っているという点で評価を得た。

（改善点）

- ・学外学修の目的をどこに置くのか検討する事が必要であるとの指摘を受けた。「女性のエンパワーメント」という目標は目的としては大きすぎるため、例えば、特にどの段階のエンパワーメントを目的とするのかという視点に基づいて目的を絞り込み、成果を可視化すべきとの指摘である。
- ・同じく、学外学修の目的、特に学生の成長目標をどこに置くのかを検討すべきとの指摘も受けた。例えば、社会人基礎力の中でも「主体性」を育むことを大事だと考えるのであれば、津田塾大学として身に着けて欲しい「主体性」をレベルごとに言語化して、具体的に学生や受け入れ先に目標を共有していく事を行ってはどうか、といった提案がなされた。このように目標の絞り込み、具体化という指摘は3人の評価者すべてからの指摘を受けている。
- ・学外学修センターの意義として「学外で学ばせる事」があるにも関わらず、理系は教員を含めて外で学ぶ事の必要性を感じておらず、学生にも学外学修のメリットが伝わっていないという点について、学内特に教員の理解を得る事が必要ではないか、という指摘を得た。

これらの内部・外部評価の結果を踏まえ、2020年度は経済的な面でも補助金受給が終了して初めての年度を迎える事もあり、組織・人員体制の見直しや、掲げている目標に対しての再検討を行っていきたい。特に、外部評価者より指摘を受けた目的の絞り込みや可視化の再検討内容によっては、組織・人員体制にも影響がでてくるため、慎重に議論を行う事としたい。加えて、2019年度より継続して議論している学外学修科目と正課授業との連携、もしくは学外学修科目を「随意科目」から「共通科目」に繰り入れる等の検討を引き続き行い、学外学修の成果を名実ともに可視化する作業を行っていきたい。